

# 『駿遠へ移住した徳川家臣団』における岡田清直・岡田鋇次郎の謎（その１）

著者	小栗 勝也
雑誌名	静岡理工科大学紀要
巻	28
ページ	37-47
発行年	2020-05-25
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1617/00000261/">http://id.nii.ac.jp/1617/00000261/</a>

## 『駿遠へ移住した徳川家臣団』における岡田清直・岡田錠次郎の謎（その1）

The Re-examination on the brief history of OKADA Kiyonao/OKADA Jyojiro in MAEDA's book, vol.1

小栗 勝也\*  
Katsuya OGURI

## 1. はじめに

岡田清直は、明治5年6月に設立された袋井地域初の小学校である用行義塾において、掛川から招かれて教師を務めていた人物である。彼については、拙稿「用行義塾と戸倉新資料のこと」<sup>(1)</sup>で紹介した新資料から、初めて正しい姓名が判明した。この岡田について詳しく知りたいと考え、調査を始めたところ、断片的な情報が僅かに得られることはあっても詳しい経歴等については何も分からない状態が続いていた。その頃、筆者は、郷土史への関心が高く、個人で資料収集をされている袋井タクシー(株)会長・鈴木邦彦氏と知り合いとなった。鈴木氏に岡田のことを話したところ、前田<sup>きょういちろう</sup>匡一郎氏が執筆した『駿遠へ移住した徳川家臣団』を紹介され、そこに岡田清直の記録があることを知った。同書によると、岡田清直は、もと幕臣で箱館奉行配下の役人・岡田錠次郎であると記されている。全く不明であった岡田の経歴が分かったことを喜び、鈴木氏から情報提供を受けた背景を含めて、『文芸袋井』第12号掲載の拙稿<sup>(2)</sup>で、そのことを紹介した。

しかしながら、『文芸袋井』掲載稿でも述べた通り、前田氏の書籍では、岡田清直・錠次郎の情報をどこから得たのかが丁寧に記されておらず、それ故に、岡田清直と岡田錠次郎を同一人物であると判断した前田氏の根拠が不明のままであった。その根拠を確かめるには<sup>(3)</sup>、氏が参考にした文献を全て再調査する必要があるが、その作業量を想像すると実行は困難に思われ、当時は本当に断念していた。そのことも上記拙稿に記している。しかし、その後、改めて思い直し、再確認の作業を始めることにした。

本稿は、その作業の結果をまとめたものである。但し、掲載誌の規定上、掲載稿1つ当りの頁数が限られているため、幾つかに分割して公表することにした。

(1) 小栗勝也「用行義塾と戸倉新資料のこと」(『静岡理科大学紀要』第23巻、2015年、所収)

(2) 小栗勝也「用行義塾の教師・岡田先生について」(袋井市文化協会・袋井市教育委員会編集発行『文芸袋井』第12

号、2018年3月1日、所収)

(3) 最後の手段は前田氏本人に尋ねることであるが、その前に自前のできる仕事は済ませておくのがマナーであると、学部生の時から指導教授に教えられていたので、今回の文献調査を優先した次第である。なお、前田氏本人は既に他界されていることを、前田氏の高校(掛川西高校)の後輩でもある三谷充弘氏から教えて頂いた。

## 2. 調査の材料と方法

前田氏の本によれば、岡田清直・錠次郎の情報は主に『江戸幕臣人名事典』に依拠していることが略号で示されているが、同事典には岡田錠次郎のことは記されていても岡田清直のことは全く記されていない。このことも『文芸袋井』掲載稿で筆者は紹介した。従って、両名が同一人物であることの根拠は他の資料にあるはずである。それが何であるのかを知るには、前田氏が用いた参考文献を全て再検証するしか方法はない。

そのために、まず行うべきことは、検証の対象となる文献を確定することである。

前田氏による『駿遠へ移住した徳川家臣団』は全部で5巻刊行されている<sup>(1)</sup>。最初に刊行された書には巻号表記はなく、続編から「第二編」と記されるようになった(現物の巻号は漢数字で記されているが、本稿では以下、本書の巻号表記をアラビア数字で統一する)。そこで便宜上、巻号の記載がない最初の書についても、本稿では第1編と呼んで区別することにしたい。同書全5編のうち、岡田清直については、第1編と第3編の2つに記されている。第3編における岡田の記載部分は、第1編のそれと比べると加筆修正がなされており、より詳しい記述となっている。

従って、前田氏が岡田清直の項目を書くにあたって参考にした資料は、第3編を書くまでに使用された文献ということになる。そこで、第1編から第3編までに記されている文献を全て書き出してみることにした。

まず、第1編の「凡例」(4頁)で前田氏は、「本書は次の名簿を基に作成した」と述べた上で、以下の資料を列記

している。

駿藩各所分配姓名録  
駿府へ移住相願候家族人数書  
静岡御役人附  
沼津御役人附  
静岡学問局  
御入国御人数町宿帳  
駿府藩役人名鑑  
駿河表へ召連候家来  
静岡士族名簿  
各種官員録・職員録

最後の官員録・職員録は「各種」とあるので複数あることが予想できる。

これらの資料について、同書 5 頁以下に「解説」が付されており、そこには資料の簡単な紹介と所蔵場所が記されているが、所蔵場所が記されていない場合もある。所蔵場所は、おそらくは前田氏が調査をした場所と同じであろう。「解説」に記された資料の所蔵場所に関する情報を、そのまま引用する形で丸括弧内に示すと以下ようになる（【 】は小栗による注記を示す）。

駿藩各所分配姓名録（静岡県立図書館所蔵）  
駿府へ移住相願候家族人数書【所蔵場所の記載なし】  
静岡御役人附（静岡県立図書館所蔵）  
沼津御役人附（静岡市立図書館所蔵）  
静岡学問所局【「解説」では「局」の前に「所」の文字がおかれているので、ここではその表記で示した】（雑誌「同方会誌」掲載）  
御入国御人数町宿帳（原本静岡県立図書館 静岡市史（近代史料）より抜粋）  
駿府藩役人名鑑【所蔵場所の記載なし】  
駿河表へ召連候家来姓名録【「解説」では「家来」のあとに「姓名録」と書き足されているので、ここではその表記で示した】（国立国会図書館所蔵）  
静岡士族名簿（北村氏寄贈 静岡県立図書館所蔵）  
各種官員録・職員録【凡例では「・」が付されていた部分が、この「解説」では「、」になっているので、ここではその表記で示した。長くなるが、前田氏が「解説」で記している通りの情報を、以下の丸括弧内に転記する。】（静岡藩職員録 明治二年二月作成のもの「同方会誌」に掲載 静岡県官員録「静岡県史」 官員録・改正官員録「西村隼太郎編輯」 補珍明治官員録 静岡県学事関係職員録「県教育新誌社」 静岡県職員録「古都万古」、「神谷源太郎」、「小池直次郎」編 静岡県職員録「静岡市史」掲載ほか 官員履歴「明治初期の静岡県史料」）

凡例と解説で、資料名が若干異なっていたり、また特に最後の各種官員録、職員録について記された解説文では、説明文の切れ目が不鮮明な上に、編者に鍵括弧を付すなど、普通の学術的文献ではあり得ない記載の仕方がある<sup>(2)</sup>。

前田氏が依拠した資料は上に列記したものだけではない。第 1 編の「凡例」で資料名を列記したあとに、「各、経歴欄最終に右記以外の参考文献を補記した」と書かれているからである。つまり、上記以外にも参考にした文献があることになる。具体的にその資料が何であるかについては、本書の中で示されている「経歴欄最終」を見なければならない。例えば岡田清直の場合は、経歴が記された箇所の最終部分に「江戸」と記されている。これが何を意味するかは、「凡例」では何も書かれていないので分からない。しかし、本書の巻末（358 頁～）にある「参考文献及び資料」の所に資料名が列記されていて、それぞれの資料名の下部に、丸括弧で略称が記されている場合がある。その中で「江戸幕臣人名事典第一—四巻」の下に「（江戸）」と置かれている。「江戸」と書かれたものは、この資料のみである。そのため、岡田の経歴の末尾に記されていた「江戸」の文字は、この巻末資料にある「江戸幕臣人名事典」のことであると分かる（『江戸幕臣人名事典』に一重括弧が付したのは、ここでは前田氏が記したそのままの引用であることを示す）。

略称として使われているものは「江戸」以外にも多数あり、巻末の文献一覧の中で、括弧付きの略称と共に多くの書名が記されている。これらも今回の再検証の対象にしなければならない。

従って、第 1 編では以上の「凡例」、「解説」、そして巻末の「参考文献及び資料」（以下「巻末資料」とする）から資料を抽出することができる。その総数は 101 点（後掲表 1 の No.1～101）となる。

第 2 編には、巻末の 369 頁以下の「参考文献及び資料」（以下、「巻末資料」とする）に、合計 80 点の資料が列記されている。但し、373 頁に「その他の文献は掲載を割愛」と記されており、明記されない他の資料があることを断っている。しかし、「その他」の表記に含まれる資料を無限であり、調査することは不可能である。そのため、「他」に含まれるものは本稿の調査対象とはせず、本文中に明記された文献のみに限定することにした。なお、第 2 編に資料名が記されたものは、多くが第 1 編で紹介されたものと重複しており、初出の資料は 23 点（後掲表 1 の No.102～124）のみである。

第 3 編には、58 頁以下に資料の記載がある。「徳川家臣団名簿作成資料の説明」の見出しから始まる説明文の中で、「本編家臣団の名簿は左記資料をベースに作成した」と書かれており、その後に 10 点の資料（以下「ベース資料」とする）が列記されている。続いて、「以上のほか主な参考資料」（以下「参考資料」と略す）として 31 点が列記

表 1 前田氏が用いた資料の一覧 (左端のNo.は小栗が便宜的に付した通し番号。【 】部分は小栗による補注)

No.	前田氏が記す資料名等の情報	記載された場所
1	駿藩各所分配姓名録 学問所御用製本所駿府江川町本屋市蔵 静岡県立図書館所蔵 《静岡県立中央図書館蔵》【第3編では所蔵場所が《 》内のように変更】	第1編の凡例、解説 第3編のベース資料
2	駿府へ移住相願候家族人数書 《駿府へ移住相願候家族人数書 池沢政太郎書写 静岡県立中央図書館》 【第3編では《 》内のように変更】	第1編の凡例、解説 第3編のベース資料
3	静岡御役人附 明治三年三月作成 静岡県立図書館所蔵 《静岡御役人附 静岡県史史料編一六 近現代一 同【「静岡県立中央図書館蔵」と同じ】》 【第3編では《 》内のように変更】	第1編の凡例、解説 第3編のベース資料
4	沼津御役人附 静岡市立図書館所蔵 《沼津御役人附 全 静岡市立中央図書館ほか 原本 沼津市明治史料館》【第3編では《 》内のように変更】	第1編の凡例、解説 第3編のベース資料
5	静岡学問所局 雑誌「同方会誌」掲載 【凡例では資料名が「静岡学問局」になっている】	第1編の凡例、解説
6	御入国御人数町宿帳 原本静岡県立図書館 静岡市史（近代史料）より抜粋 《静岡市史近代史料編 原本 静岡県立中央図書館蔵》【第3編では資料名の後が《 》内のように変更】	第1編の凡例、解説 第3編のベース資料
7	駿府藩役人名鑑 明治二年一月学問所御用製本所本屋市蔵板元 《駿府藩役人名鑑 学問所御用製本所駿府江川町本屋市蔵 同【「静岡県立中央図書館蔵」と同じ】》 【第3編では《 》内のように変更】	第1編の凡例、解説 第3編のベース資料
8	駿河表へ召連候家来姓名録 国立公文書館所蔵 【凡例では「駿河表へ召連家来」とのみ略記されている】 《駿河表へ召連候家来姓名簿 同【「池沢政太郎書写」と同じ意味】 同【「静岡県立中央図書館蔵」のこと】 原本 内閣文庫》【第3編では《 》内のように変更。資料名末の「簿」は前田氏が記したまま】	第1編の凡例、解説 第3編のベース資料
9	静岡士族名簿 北村氏寄贈 静岡県立図書館所蔵 《 同【静岡県立中央図書館蔵」と同じ】》【第3編では資料名の後は《 》内のように変更】	第1編の凡例、解説 第3編のベース資料
	各種官員録、職員録【以下の区別あり・・No.10～17 まで】	第1編の凡例、解説
10	静岡藩職員録 明治二年二月作成のもの「同方会誌」に掲載 《静岡藩職員録 雑誌「同方会誌四五」掲載 原本 静岡県立中央図書館》 【第3編では《 》内のように変更】	第1編の解説 第3編のベース資料
11	静岡県官員録「静岡県史」	第1編の解説
12	官員録・改正官員録「西村隼太郎編輯」	第1編の解説
13	補珍明治官員録 【「補珍」は前田氏が記したまま】	第1編の解説
14	静岡県学事関係職員録「県教育新誌社」 《静岡県学事関係職員録「明治三一年」 静岡県教育新報社編》【第3編では《 》内のように変更】	第1編の解説 第3編の参考資料
15	静岡県職員録「古郡万古」、「神谷源太郎」、「小池直次郎」編 《静岡県職員録 「古郡万古」 「神谷源太郎」および「小池直太郎」編》 【第3編では《 》内のように変更】	第1編の解説 第3編の参考資料
16	静岡県職員録「静岡市史」掲載ほか	第1編の解説
17	官員履歴「明治初期の静岡県史料」 《明治初期静岡県史料「第一巻」 官員履歴 静岡県史料刊行会》【第3編では《 》内のように変更】	第1編の解説 第3編の参考資料
18	明治維新人名事典（維新） 昭和五六年 吉川弘文館	第1編の巻末資料 第2編の巻末資料
19	幕末維新人名事典（幕末） 昭和五三年 学芸書林	第1編の巻末資料 第2編の巻末資料
20	日本現今人名辞典（現今） 明治三三年 同辞典発行所	第1編の巻末資料 第2編の巻末資料
21	日本現代人名辞典（現代） 大正元年 中央通信社	第1編の巻末資料 第2編の巻末資料
22	明治過去帳 （過去） 昭和四六年 東京美術	第1編の巻末資料 第2編の巻末資料
23	大正過去帳 （大過去） 昭和四八年 東京美術 【第2編では略称が「(大過去帳)」に変更】	第1編の巻末資料 第2編の巻末資料
24	大日本人名辞書（大日本） 昭和一九年 大日本人名辞書刊行会《同辞書刊行会》 【第2編では発行元が《 》内のように変更】	第1編の巻末資料 第2編の巻末資料
25	江戸幕臣人名事典第一―四巻（江戸） 平成元年 新人物往来社 《江戸幕臣人名事典（江戸） 平成元年 新人物往来社》【第2編では《 》内のように変更】	第1編の巻末資料 第2編の巻末資料
26	嶽陽名士傳 （嶽陽） 昭和二四年 山田万作著	第1編の巻末資料 第2編の巻末資料
27	静岡のひとびと 昭和四九年 静岡市教育委員会	第1編の巻末資料 第2編の巻末資料
28	郷土の発展に尽した人々（郷土） 昭和五六年 静岡県教育委員会	第1編の巻末資料 第2編の巻末資料
29	郷土の先達 平成二年 鈴木富男著	第1編の巻末資料 第2編の巻末資料

表 1 の続き (その 2)

No.	前田氏が記す資料名等の情報	記載された場所
30	静岡県徳行録（徳行録） 昭和十六年 静岡県	第 1 編の巻末資料 第 2 編の巻末資料
31	静岡県人物誌（人物） 昭和四十九年 静岡県 【第 2 編では略称が「(人物誌)」に変更】	第 1 編の巻末資料 第 2 編の巻末資料
32	東海三州人物誌（東海三州） 大正三年 伊東圭一郎著	第 1 編の巻末資料 第 2 編の巻末資料
33	静岡育英会会報（育英会）	第 1 編の巻末資料
34	雑誌 同方会誌（同方） 昭和五二年 立体社	第 1 編の巻末資料 第 2 編の巻末資料
35	雑誌 旧幕府（合本四冊） 原書房	第 1 編の巻末資料 第 2 編の巻末資料
36	明治宝鑑（明宝） 明治四五年 原書房	第 1 編の巻末資料
37	雑誌 史談会速記録（史談会） 昭和四六年 原書房	第 1 編の巻末資料
38	静岡県現住者人物一覧（現住者） 高室梅雪著	第 1 編の巻末資料 第 2 編の巻末資料
39	沼津兵学校 昭和六一年 沼津市明治史料館	第 1 編の巻末資料
40	沼津兵学校とその人材（沼津兵）昭和一五年 大野虎雄著 《(沼津兵学校)》 【第 2 編では略称表記が《 》内のように変更】	第 1 編の巻末資料 第 2 編の巻末資料
41	沼津兵学校付属小学校（沼津小）昭和一八年 大野虎雄著 《(沼津小学校)》 【第 2 編では略称表記が《 》内のように変更】	第 1 編の巻末資料 第 2 編の巻末資料
42	静岡名墓誌 昭和七年 柘植清著	第 1 編の巻末資料
43	牧ノ原開拓士族名簿（牧ノ原）昭和三九年 金谷郷土史研究会 《牧ノ原開拓士族名簿（牧ノ原）昭和三九年 金谷郷土史研究会》【第 2 編では《 》内のように変更】 〔牧ノ原開拓士族名簿 昭和三十九年一月 金谷郷土史研究会〕【第 3 編では〔 〕内のように変更】	第 1 編の巻末資料 第 2 編の巻末資料 第 3 編の参考資料
44	牧ノ原開拓史考 昭和四九年 大石貞雄 《牧ノ原開拓史考 昭和四九年 大石貞雄著》【第 2 編では《 》内のように変更】	第 1 編の巻末資料 第 2 編の巻末資料
45	維新前後の静岡 昭和一六年 小山有言著	第 1 編の巻末資料 第 2 編の巻末資料
46	教育と人物 昭和四五年 高天神城戦史研究会	第 1 編の巻末資料 第 2 編の巻末資料
47	帝国海軍教育史一巻 昭和四八年 原書房	第 1 編の巻末資料 第 2 編の巻末資料
48	横須賀海軍船廠史（海軍船廠史）大正四年 横須賀海軍工廠	第 1 編の巻末資料 第 2 編の巻末資料
49	横須賀製鉄所の人びと（横須賀） 昭和五八年 富田仁・西堀昭 共著	第 1 編の巻末資料 第 2 編の巻末資料
50	箱館戦争始末記（箱館戦争）昭和四八年 栗賀大介著	第 1 編の巻末資料 第 2 編の巻末資料
51	新撰組事典（新撰組） 昭和四八年 新人物往来社 【「撰」の文字は前田氏が記したまま】	第 1 編の巻末資料
52	勝海舟全集別巻二海舟別記 昭和五七年 勁草書房 《勝海舟全集別巻二 昭和五七年 勁草書房》【第 2 編では《 》内のように変更】	第 1 編の巻末資料 第 2 編の巻末資料
53	静岡静高百年史上巻 昭和五三年 同編集委員会	第 1 編の巻末資料 第 2 編の巻末資料
54	静岡県教育史（県教育史） 昭和四八年 静岡県教育史刊行会	第 1 編の巻末資料 第 2 編の巻末資料
55	静岡県警察史（県警察史） 昭和五三年 同編集委員会 《同編集委員会》 【第 2 編では《 》内のように変更】	第 1 編の巻末資料 第 2 編の巻末資料
56	静岡県史（資料編一七・近現代二）平成二年 静岡県 《静岡県史資料編一六・一七 近現代一 発刊静岡県》【第 3 編では《 》内のように変更】	第 1 編の巻末資料 第 2 編の巻末資料 第 3 編の参考資料
57	明治初期の静岡県史料 昭和四二年 静岡県史料刊行会	第 1 編の巻末資料 第 2 編の巻末資料
58	顕要職務補任録	第 1 編の巻末資料
59	静岡市史（近代） 昭和四四年 静岡市	第 1 編の巻末資料 第 2 編の巻末資料
60	静岡市史（近代史料） 昭和四四年 静岡市	第 1 編の巻末資料 第 2 編の巻末資料

表 1 の続き (その 3)

No.	前田氏が記す資料名等の情報	記載された場所
61	静岡市史編纂史料 昭和二年 静岡市役所	第 1 編の巻末資料 第 2 編の巻末資料
62	浜松市史 (史料編五) 浜松市役所	第 1 編の巻末資料 第 2 編の巻末資料
63	駿東郡沼津町誌 昭和五五年 沼津町役場著 《昭和五五年復》 【第 2 編では《 》内のように発行年の所に「復」の文字が挿入された】	第 1 編の巻末資料 第 2 編の巻末資料
64	沼津市誌 昭和三六年 沼津市役所	第 1 編の巻末資料 第 2 編の巻末資料
65	群馬県史資料編二 (群馬県史) 昭和六二年史編纂委員会 《群馬県史資料編二 昭和六二年 同史編纂委員会》【第 2 編では《 》内のように変更】	第 1 編の巻末資料 第 2 編の巻末資料
66	城下町相良区史 昭和六一年 榛原郡相良町	第 1 編の巻末資料
67	千代田誌 昭和五九年 同編集委員会	第 1 編の巻末資料
68	神奈川県史料第八巻 昭和四七年 神奈川県立図書館 【第 2 編では巻号表記の「第」が消えている】	第 1 編の巻末資料 第 2 編の巻末資料
69	ある幕臣からみた明治維新 初代駅通正杉浦譲 昭和五二年 高橋善七 《初代駅通正杉浦譲 昭和五二年 高橋善一著》【第 2 編では《 》内のように変更】	第 1 編の巻末資料 第 2 編の巻末資料
70	大久保一翁 昭和五四年 松岡英夫著	第 1 編の巻末資料
71	後は昔の記他 昭和四五年 林 薫著	第 1 編の巻末資料
72	名ごりの夢 今泉みね述	第 1 編の巻末資料
73	江原素六 昭和六〇年 辻 真澄著 【「辻」の漢字は、本来は 1 点しんじょうが正しいが、PC で表示できないため、本稿では全て 2 点しんじょうの文字で表記している。以下も同じ】	第 1 編の巻末資料 第 2 編の巻末資料
74	朝霧の覚 昭和一〇年 池田忠一著	第 1 編の巻末資料
75	石坂周造研究 昭和五二年 前川周治著	第 1 編の巻末資料
76	前島密自叙伝 昭和三年 伝記刊行会 《同刊行会》【第 2 編では出版元が《 》内のように変更】	第 1 編の巻末資料 第 2 編の巻末資料
77	福地桃痴 昭和四〇年 柳田 泉著	第 1 編の巻末資料
78	平賀敏君伝 昭和六年 同伝記編纂会	第 1 編の巻末資料
79	坂本竜馬を斬った男今井信郎 昭和四六年 今井幸彦著	第 1 編の巻末資料
80	海軍事始 肥田浜五郎の生涯 昭和五〇年 土屋重朗著	第 1 編の巻末資料
81	はままつ歴史発見 昭和六二年 神谷昌志著	第 1 編の巻末資料
82	山路愛山研究 静岡近代史研究四号	第 1 編の巻末資料
83	赤松則良半生記 昭和五二年 赤松範一編注	第 1 編の巻末資料
84	幕末下級武士の記録 昭和六〇年 山本政恒著	第 1 編の巻末資料
85	静岡県近代史研究十五、十六号 静岡県近代史研究会	第 1 編の巻末資料
86	静岡県郷土研究 静岡県郷土研究会	第 1 編の巻末資料 第 2 編の巻末資料
87	山田大夢 地方史静岡六号	第 1 編の巻末資料
88	転向明治維新と幕臣 昭和四四年 しまねきよし著	第 1 編の巻末資料 第 2 編の巻末資料
89	日本海軍お雇い外人 昭和六三年 篠原 宏著	第 1 編の巻末資料 第 2 編の巻末資料
90	幕末おろしゃ留学生 平成三年 宮永 孝著	第 1 編の巻末資料
91	江戸幕府役職集成 (増補版) 平成二年 笹間良彦著 《江戸幕府役職修成 (増補版)》 【第 2 編では資料名が《 》内のように変更】	第 1 編の巻末資料 第 2 編の巻末資料
92	山中庄治日記 昭和四九年 沼津市立駿府図書館	第 1 編の巻末資料 第 2 編の巻末資料
93	旧幕臣中野悟一 静岡県近代史研究九号	第 1 編の巻末資料
94	浜岡人物誌 佐倉・比木編 昭和六二年 同編集委員会	第 1 編の巻末資料
95	関口隆吉の生涯 昭和五八年 八木繁樹著 《八木茂樹著》【第 2 編では著者が《 》内のように変更】	第 1 編の巻末資料 第 2 編の巻末資料
96	山岡鉄舟の一生 昭和四二年 牛山栄治著 《牛山英治著》【第 2 編では著者が《 》内のように変更】	第 1 編の巻末資料 第 2 編の巻末資料
97	勝海舟の参謀 藤沢志摩守 昭和四九年 安西 愈著	第 1 編の巻末資料

表1の続き (その4)

No.	前田氏が記す資料名等の情報	記載された場所
98	徳川慶喜公伝 昭和四三年 渋沢栄一著 《徳川慶喜公傳 昭和四三年 平凡社》【第2編では《 》内のように変更】	第1編の巻末資料 第2編の巻末資料
99	大森鐘一 昭和五年 池田 宏編	第1編の巻末資料 第2編の巻末資料
100	史料からみた勝海舟 昭和四九年 田村栄太郎著	第1編の巻末資料 第2編の巻末資料
101	父渋沢栄一 昭和三四年 渋沢秀雄著	第1編の巻末資料 第2編の巻末資料
102	江戸幕府勘定所史料(勘定所) 昭和六一年 吉川弘文館	第2編の巻末資料
103	江戸幕府役職集成 昭和六二年 雄山閣出版 【但しNo91で増補版が既に登場している点に注意】	第2編の巻末資料
104	江戸幕府旗本人名事典 平成二年 原書房	第2編の巻末資料
105	牧の原開墾の曙覚書 平成二年 榛葉禮一著	第2編の巻末資料
106	東京府史料ほか各県史料 国立公文所館所蔵	第2編の巻末資料
107	静岡県近代史研究 静岡県近代史研究会	第2編の巻末資料
108	地方史静岡 同研究会	第2編の巻末資料
109	沼津史談会 同研究会	第2編の巻末資料
110	磐南文化 同研究会	第2編の巻末資料
111	明治史料館通信 沼津市明治史料館	第2編の巻末資料
112	静岡藩始末記 昭和五〇年 三枝康高著	第2編の巻末資料
113	御注進書綴込 韭山御役所	第2編の巻末資料
114	小伝林鶴梁 坂口筑母著	第2編の巻末資料
115	静岡県紳士録 大正五年 中尾栄次郎著	第2編の巻末資料
116	東京掃苔録 日本史籍協会	第2編の巻末資料
117	明治という国家 平成三年 司馬遼太郎著	第2編の巻末資料
118	幕府軍艦咸臨丸 昭和五四年 文倉平次郎著	第2編の巻末資料
119	渋沢栄一伝記 昭和三〇年 渋沢栄一伝記資料刊行会	第2編の巻末資料
120	宣教再会百年誌 昭和五九年 カトリック教会	第2編の巻末資料
121	静岡県英学史 昭和四二年 飯田 宏著	第2編の巻末資料
122	静岡の史話と伝説 飯塚傳太郎著	第2編の巻末資料
123	久能山叢書 昭和五六年 同東照宮社務所	第2編の巻末資料
124	静岡県の医史と医家傳 昭和四八年 土屋重朗著	第2編の巻末資料
125	遣米使節史料集成 昭和三六年 風間書房	第2編の巻末資料
126	駿藩名譜 学問所御用製本所駿府江川町本屋市蔵 宮内省書陵部	第3編のベース資料
127	明治期の各種官員録 明治五年から明治一九年まで 写 静岡県立中央図書館	第3編の参考資料
128	東京府史料 転免履歴 東京都公文書館	第3編の参考資料
129	神奈川県史料ほか各県史料 国立公文書館	第3編の参考資料
130	開拓使履歴 北海道立文書館	第3編の参考資料
131	当区内士族姓名簿 第三大区第四小区 明治九年十月改正 長坂家文書	第3編の参考資料
132	当区内士族原籍取調 同 同 同【この「同」はすべて上に同じの意】	第3編の参考資料
133	士族分限 第四大区第五小区 寄留者名簿 静岡県立中央図書館	第3編の参考資料
134	第四九区現米東京取調 明治五年二月 同【「静岡県立中央図書館」と同じ】	第3編の参考資料
135	士族扶持東京にて受取出願帳 同【「明治五年二月」と同じ】 同【「静岡県立中央図書館」と同じ】	第3編の参考資料
136	家禄証書案 明治六年 同【「静岡県立中央図書館」と同じ】	第3編の参考資料
137	家禄奉還進給類関係書類 明治三一年 同【「静岡県立中央図書館」と同じ】	第3編の参考資料
138	貫属替取調帳 明治六年—明治九年 大須賀町教育委員会	第3編の参考資料
139	家禄渡帳 同【「明治六年—明治九年」と同じ】 同【「大須賀町教育委員会」と同じ】	第3編の参考資料
140	相良勤番組士族名簿 明治四年 相良町資料館	第3編の参考資料
141	新居割付小札帳 明治四年 新居町教育委員会	第3編の参考資料

表 1 の続き (その 5)

No.	前田氏が記す資料名等の情報	記載された場所
142	新居分限帳 明治二年十二月 同【「新居町教育委員会」と同じ】	第 3 編の参考資料
143	浜松県より貫属替屋敷取調帳 明治五年 静岡県立中央図書館	第 3 編の参考資料
144	牧之原秩録公債払下願書名簿写 明治十八年 牧之原小学校	第 3 編の参考資料
145	貫属替願書 明治六年 金谷町教育委員会	第 3 編の参考資料
146	家禄奉還願書 第一大区第八小区 明治七年 沼津市明治史料館	第 3 編の参考資料
147	西熊堂諸届諸願書類 履歴明細書 同【「沼津市明治史料館」と同じ】	第 3 編の参考資料
148	第一大区八小区居住士族家族書 明治七年 同【「沼津市明治史料館」と同じ】	第 3 編の参考資料
149	華士族禄高牒 明治六年 東京都公文書館	第 3 編の参考資料
150	送籍状家禄書相添申渡 同【「明治六年」と同じ】 同【「東京都公文書館」と同じ】	第 3 編の参考資料
151	家塾開業願書 東京都台東区教育史資料	第 3 編の参考資料
152	士族奉還禄書類 明治九年 旧加島村役場文書 富士市立中央図書館	第 3 編の参考資料
153	静岡藩姓名帳 (静岡藩御賄所明治二年十月一七日) 静岡県立中央図書館	第 3 編の追加資料

以上

されている。また、第 3 編において前田氏は「以上のほか参考書として各県史、静岡県内市町村史、教育史などを参考とした」(61 頁)と書いているが、そこには具体的な書名はない。ここでも、「他」に属する資料は調査不能のため無視することにした。なお第 3 編では、「駿遠へ移住した家臣団の総数について」説明する文章(61 頁以下)の中で、これまで記されていなかった「静岡藩姓名帳」1 点が突然登場している(68 頁)ので、これを第 3 編の「追加資料」として扱うことにした。以上、第 3 編中の資料としてはベース資料 10 点、参考資料 31 点、追加資料 1 点で、合計 42 点になる。その中には第 1 編で既に紹介されている資料も多くあり、重複を除いた初出分は 28 点(表 1 の No.126~153)である。

以上の第 1 編~第 3 編で記載された資料を整理すると、実質の資料数は 153 点となり、それを一覧にしたものが表 1 である。同表では資料の初出の順に並べてある。この全てが再調査の対象資料となる。但し、後述する資料ごとの調査結果の中で詳細を示した通り、中には 1 点が複数冊(時には何十冊も)に及ぶ資料もあるため、実際に調査した資料数は 153 を遥かに上回っている。

次に、対象資料から何を調べるのかについて説明する。

既述の通り、前田氏が記す岡田清直・岡田錠次郎の情報は、『駿遠へ移住した徳川家臣団』第 3 編の記録が一番詳しい。そこで、そこに記された情報が、どの文献から拾い出されたものであるかを特定することで、前田氏が岡田のことを調べるに当り、「江戸」以外の文献で用いた資料が何であるのか、そして一番重要な岡田清直と岡田錠次郎が同一人物であると判定した根拠となる資料は何であったかを解明できるはずである。

そのためにまず、前田氏が第 3 編で記した岡田に関する最も詳しい経歴情報を、項目毎に細分化して示すことにす

る。はじめに、第 3 編中の岡田の記録をそのまま転載すると次のようになる。

一九五 岡田清直 三十一歳

錠次郎 天保八年生 高八十俵三人扶持(本高十三俵一人半扶持) 子息鎌太郎(明治五年静岡県留学生支那学修行)

安政六年箱館奉行支配定役下役 元治元年 箱館奉行支配定役元締

明治二年 浜松奉行支配割付 同二年 横須賀勤番組世話役

同 六年 浜松県権少属 浜松第三大区長 同七年 掛川第一小学校長

同十一年三月二十三日四十一歳 教育院導誉清直居士 墓掛川市天然寺

冒頭の「一九五」は同書で紹介されている個人に付された通番であり、特に意味はないので、その次の文字以下を細分化することにする。どこで区切って細分化するのは筆者の判断により行ったが、表 2 に示すように、全体を【A】から【0】の項目に分けられると筆者は考えた。それぞれの項目に該当する情報を、表 1 の資料から得られた場合には、資料名と頁数をメモしていき、全ての項目について根拠となる資料が明らかになれば、前田氏が自書中に示した文献だけで岡田の記録が書かれたことを証明できる。もし根拠を明らかにできない項目があれば、明示されていない別の何らかの情報を基に、前田氏は岡田の記録を書いたことになる。その場合には、他の情報を用いていながら、それを記さない形で本書を書いたことになり、問題のある本であることを証明することにもなる。

どのような結果になるかは、資料の悉皆調査を行わなけ



表2 前田氏による岡田の情報の細目

項目	内 容
【A】	岡田清直
【B】	三十一歳
【C】	錠次郎
【D】	天保八年生
【E】	高八十俵三人扶持
【F】	(本高十三俵一人半扶持)
【G】	子息鎌太郎(明治五年静岡県留学生支那学修行)
【H】	安政六年箱館奉行支配定役下役
【I】	元治元年 箱館奉行支配定役元締
【J】	明治二年 浜松奉行支配割付
【K】	同二年 横須賀勤番組世話役
【L】	同六年 浜松県権少属
【M】	浜松第三大区長
【N】	同七年 掛川第一小学校長
【O】	同十一年三月二十三日四十一歳 教育院導 菅清直居士 墓掛川市天然寺

れば分からない。その仕事量を想像するだけで困難な作業になることは分かっていたが、それ以外に術がないので実行することにした。実際のところ、非常に辛い仕事となった。筆者は今回の調査を2017年から始めたが、本稿執筆までに足掛け4年の長時間を費やしたことになる(実は本稿執筆時もお調査未了部分が残っている)。もっとも、調査は断続的に行ったので、この間の時間をフルに費やした訳ではない。もし筆者が、この仕事だけで生活が成り立つような恵まれた立場にあったならば、調査と原稿化のために半年から1年内には実現できたと思われる位の仕事量ではある。しかし現実の筆者は多種多様の仕事に迫られる日常であり、その合間を縫って断続的に調査を行ってきたので、これほどまでに長い時間を要することになってしまった。

- (1) 奥付を見ると第1編から4編までは前田氏自身が「発行者」で、私家版であることが分かる。第5編のみは羽衣出版の発行である。発行時期は、最初のものが平成3年7月25日、第2編が平成5年2月20日、第3編が平成9年10月31日、第4編が平成12年9月1日、第5編が平成19年5月30日である。
- (2) 前田氏は静岡県近代史研究会、静岡東部歴史同好会に所属していたが、本業は静岡銀行の行員である(以上は『駿遠へ移住した徳川家臣団』の奥付より)。学者や研究者ではないから、学者の仕事に対する評価と同レベルで評価してはならないであろう。また、誤記の類は誰にでもあるから、ある程度は大目に見るべきである。しかし、記載の不備のために、判断の根拠や資料の存在を特定できないことがあるのは、5冊の単行本を発行した者の仕事として、いかなものかと思う。また、他に類書がないので、国立国会図書館でも、「幕府崩壊後、徳川家とともに静岡へ移住した幕臣を調べる」資料として、唯一、この書が紹介されており(国立国会図書館リサーチ・ナビのサイト中の「江戸時代の幕臣を調べるには」を参照のこと。URLは <https://rn>

[avi.ndl.go.jp/research\\_guide/entry/post-780.php](http://avi.ndl.go.jp/research_guide/entry/post-780.php))、貴重な労作であることは筆者も認める。しかし、そうであればこそ、根拠にした資料をもう少しだけでも丁寧に記載してもらいたかったという思いが強い。今回の岡田に関して言えば、清直と錠次郎が同一人物であるという決定的に重要な事項の根拠を、略語1つだけでもよいので記しておいて欲しかった。そうすれば、今回の筆者の作業は不要であった。

### 3. 資料ごとの調査結果

以下、表1で示した資料の調査結果を、資料の番号順に記す。なお、冒頭の太字部分は表1中の資料番号と、前田氏が記す資料名を強調して示している。また、前田氏が記す資料名は、特に収録文献等の記載がない限りは、すべて独立した単体の資料とみなし、以下では原則として二重括弧を付けて表記した。収録文献が判明している資料については、単体資料ではないという意味で一重括弧を付した。

**No.1の『駿藩各所分配姓名録』**については、この資料に6千5百余人の情報があること、「学問所御用製本所駿府江川町本屋市蔵」と記されていること、静岡県立図書館または静岡県立中央図書館の所蔵であることを、前田氏は記している(第1巻4～5頁、第3巻58頁、62頁)。

これに該当するものが静岡県立中央図書館に確かに所蔵されていた。しかも同図書館のデジタルライブラリーで公開されており、WEB上で、カラー画像で見られるようになっている。「駿藩各所分配姓名録」の名で同図書館の蔵書を検索し、「分類」番号(請求記号の一部)が「S280」と表記されるもののうち、詳細画面で資料番号に「0002747319」が表示されるものにデジタルライブラリーへのリンクURLが貼られているので、そこからデジタル資料のページに行くことができる。「静岡県立中央図書館デジタルライブラリー ふじのくにアーカイブ」から直接検索しても、それを見ることができる。

但し、同図書館にはこれの実物と、それをコピー(モノクロ)した資料、さらにそのコピーをハードカバー製本して普通書棚に配架されている資料もある。中身は全て同じである(これらを駿藩各所分配姓名録の①とする)。同図書館で閲覧するだけなら、配架資料を手取るのが最も簡単である(資料番号0004843561のもの)。筆者は配架資料も確認しているが、以下の記述はデジタル版の資料を基に記す。

この資料は横長の冊子で、上下2段に名前が記載されており、資料の体裁は明治初期の官員録に似ている。中には膨大な数の人名が記されているので、前田氏が言うように6千人以上あっても不思議ではない。また、末尾には静岡県立葵文庫の蔵書印(昭和13.4.12登録とある)があるから、前田氏が記す通り、後の静岡県立図書館(現・静岡県立中央図書館)の蔵書であることも間違いない。ただ、前田氏が記す「学問所御用製本所駿府江川町本屋市蔵」の文字は若干異なる。実物の末尾に刻されている文字は「学

問所製本所／駿府江川町／本屋市蔵」（「／」は改行を示し、小栗が付したもの）であり、「御用」の2文字はない。

実は、この資料とまったく同じ冊子が富士市立図書館にも所蔵されており、上記の静岡県立中央図書館デジタルライブラリーで同様にカラーのデジタル資料として公開されている（これを②とする）。葵文庫の蔵書と比べて紙質がよく、印字が綺麗に見えるほか、押されている蔵書印が異なるので、葵文庫版とは明らかに別に存在する同一名の資料と判定できる。こちらの末尾を見ても「御用」の2文字は記されていない。従って、「御用」の2文字は前田氏による誤記であると考えられる。

なお、デジタルライブラリーの登録情報によれば葵文庫の蔵書も、富士市立図書館の蔵書も、共に発行時期に関して「[明治2年]」と登録されているが、その理由が筆者には分からなかった。実物のどこを見ても、出版時期を示す情報はないからである。年の表記が大括弧付きであるのは、他の情報から類推した結果であるという意味かもしれないが、何の説明もないので詳細は分からない。

この謎に関しては、樋口雄彦氏の論文が参考になった。樋口氏の「静岡藩士の割付をめぐる」（『静岡県近代史研究』第36号、2011年）は、『駿藩各所分配姓名録』に記されている奉行に関する別資料の情報から、この資料が明治2年正月または2月以降の発行であると推定している（74頁、82頁）。前田氏も、明治2年2月初旬の発行と推定している（第3編63頁）。樋口氏の研究も前田氏の本も、静岡県立中央図書館にこの資料が登録された後に登場したもので、図書館側はこれらの研究を参考にすることはできない。従って同図書館が記す発行年の根拠は他にあるはずだが、それは不明と言うしかない。しかし、樋口氏や前田氏が指摘する通り、他の資料との比較に依らねば、この資料の発行時期を推定できないのであるから、大括弧付きで時期を表示せねばならないのは当然であろう。なお、樋口氏の論文は、分配姓名録そのものに関して詳しく論じているので大いに参考になる。

さて、この資料に岡田の情報があるか否かを探さなければならぬのだが、そこに記されている文字は木版印刷ながら毛筆の崩し字体であり、筆者には判読が難しいことは一目ただけで分かった。ところが、同じ静岡県立中央図書館の蔵書として、同じ資料名でありながら、「池沢政太郎／編」と記されたものが別に7件も存在していることも知っていた。池沢氏の名は、この後も何度も登場するが、この時期の静岡関連の文書を解説して、手書きのメモを多数残し、県立図書館に寄贈した奇特定の人物である。東京都の方である。

池沢氏が手書きで書いたものは、浜松市立中央図書館の蔵書でも先に見たことがあり、筆者にも読める文字であることを知っていた。そこでまずは、池沢氏による『駿藩各所分配姓名録』を見るべきだと考えた。しかし、その頃（2018年）の静岡県立中央図書館では、建物に亀裂が見つ

かった関係で通常の利用ができない状態にあった（2019年3月14日から全面再開）。それでも小さな閲覧室が用意されており、訪れて資料を請求すれば、工事の影響を受けない書棚にある本で、利用可能のものは、その場で閲覧できたのだが、そのことを筆者が知るのは、これより少し後のことであった。

そこで、この時は県立中央図書館に行っても無駄であると考え、静岡理科大学附属図書館と県立中央図書館の間での提携関係によるサービスである相互貸借制度を利用して、理科大学の図書館から蔵書を取り寄せてもらうことにした。相互貸借では、貸出し禁止資料は原則として利用できないので、貸出しが可能なものを調べたところ1点だけが該当した。それは『駿藩各所分配姓名録 〔1-2〕府中・浜松・掛川・遠州横須賀』であった（これを③とする）。横須賀の勤番組に岡田は所属していたと前田氏の本に記載されているので、この資料を借り受けられるのは好都合と考え、早速、手続きをして取り寄せてもらった<sup>(1)</sup>。

届いた資料を見ると、それは、池沢氏が原資料中に記載されている人名を地域別、50音順に手書きでまとめた用紙をコピーし、ハードカバー製本したものであった。50音順に整理されているので岡田を調べるのは簡単であった。ところが横須賀の所にはその名は存在せず、なぜか浜松のところに岡田錠次郎の名があった。

次に為すべきことは、原資料で岡田の名を確認することである。①で確認したところ、以下のことが分かった。

①の資料では、袋綴じの山折部分に丁の数（綴じる前の用紙を開いた時の1枚分＝刷る時の1枚分に順に数を付けたもの）が記されているが、そこに「ハ 四」（原文縦書き）と記された箇所（綴じた時の右側頁）下段に岡田の名があった（写真1参照）。毛筆の崩し字を関連辞書と付き合わせながら、「岡田錠次郎」と読めると判断した。更に確証を得るため、③の資料の中で、池沢氏が記していた他の岡田姓の全員についても探し、岡田錠次郎と読めるものは当該箇所だけであることを確認した。従って、これが「岡田錠次郎」であることは間違いない。

ところで、この資料そのものが、写真1で示したように、人名を羅列した部分が殆どを占める資料であり、説明等は何もない。「分配」された地域ごとに、まとめて人名が記されているだけである。例えば原資料の冒頭に出てくる「府中」では、府中奉行、同添奉行等のように役職名と人名が記さ

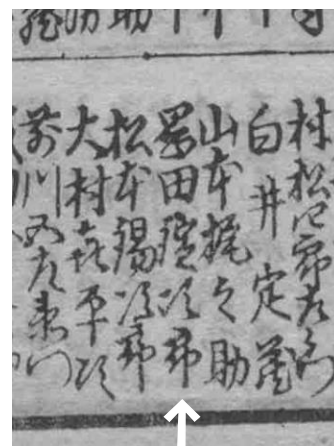


写真1 『駿藩各所分配姓名録』で岡田錠次郎の名がある箇所（白色矢印〔小栗による〕の部分）

その次の新しい頁から、「府中」の文字だけが見出しのように置かれた後に、役職名の無い人名が何百と続く。

府中の次が「浜松」で、同様に役職者名を記した頁の次から、「遠州浜松」の見出し文字の後に、人名が列記されている。浜松の冒頭で役職名と人名が羅列されている最初の紙には、山折部分に「ハ 一」と付されているが、その文字の意味は、浜松に分配された人名を記した版木の 1 つ目（1 丁目）ということであろう。従って、駿河に渡ってきた徳川家の家臣団のうち、浜松に分配された者の名を列記している部分が「ハ 一」以下と考えられる。写真 1 の部分は、前述の通り、浜松の 4 丁目にあたる「ハ 四」にあった。

すると、前田氏の本の中で岡田錠次郎について、「明治二年 浜松奉行支配割付」と記された部分（表 2 の【J】）の典拠が、この資料ではないかと推定される。

浜松組の筆頭は浜松奉行の井上八郎であり、その後に列記された無役の人間の中に岡田はいたから、浜松奉行配下の 1 人という意味で、前田氏は「浜松奉行支配割付」と記したのかもしれない。

それが明治 2 年であると前田氏が記したのは、この資料の出版年として県立中央図書館に登録している情報に依拠したのかもしれない。但し、前田氏自身は、【J】の部分の根拠となった資料が何であるのかについて一切記していないので、あくまでも筆者による推測である。

それにしても前田氏は、池沢氏による手書き資料を見ずに、原資料だけで岡田錠次郎の名前を見つけたのであろうか。もし筆者のように、池沢氏の資料の手助けを借りたのであれば、それに謝する意味でも、池沢氏の名を、駿藩各所分配姓名録を紹介する部分のどこかで記すべきであるが、それが無い。前田氏の本では、他の所では池沢氏の名が記されることがあるのに、この資料にはそれが無い。そのため前田氏は、池沢氏の 50 音別資料を用いずに原資料から直接、岡田の名を発見したことになる。岡田に限らず、他の人物についても同じことになる。そうすると前田氏は、筆者とは異なり、どんな崩し字でも確実に読みこなせる達人であったことになる。ただただ頭が下がるばかりである。

なお、この資料に関して補足すべきことが更に 3 つある。

(1) 面倒なことに、『駿藩各所分配姓名録』は、中身が異なる同名の別資料が存在している。国立国会図書館デジタルコレクションで公表されている『駿藩各所分配姓名録』（これを④とする）がそれで、大きめの和紙 3 枚を折りたたむようにして和綴じに製本された資料である。最初の見返し部分に「学問所製本所」「駿府江川町 本屋市蔵」の文字が記されているので、ここは①～③と同じである。

国会図書館に登録されている書誌情報では「1869 年（明治 2 年）の出版となっている。折りたたまれた紙の 2 枚目（「静岡藩」の役人リスト）の欄外右下部分に「明治二年己巳年九月時々改之」と記されているので、ここから 1869 年を出版年として採用したと思われる。

中身を見ると、大きな和紙とはいえ 3 枚に記された人名の数は数百程度で、前田氏が紹介する 6 千人以上の記載があるという説明とは明らかに異なる。同じ「駿藩各所分配姓名録」の名であっても中身が異なる別資料であり、それゆえ前田氏が見たものとは違うことも自明である。そのため無視してもよいのだが、一応、これについても中身を確認した。

この資料の折りたたみ部分の 1 枚目にある「少参事学校掛」の所の「五等教授」のリストの筆頭に「漢 岡田深蔵」がある。また、折りたたみ部分の 3 枚目にある静岡藩の役人リスト中に、「静岡最寄」の「郡方」の 1 人として「岡田繁三郎」が、更に「浜松最寄」の「郡方」の 1 人として「岡田甲子太郎」、「前様御附」の「三等家従口勤番」に「岡田力次郎」の名（「口」は判読難の文字。また「次」は「以」にも見える。「カ」は、そうであるか明確ではないことを示す記号で、小栗が付したもの）があるが、岡田清直・錠次郎の名はなかった。

(2) 『駿藩各所分配姓名録』とは名前が異なるが、恐らく中身は同一であるか若干の違いしかない資料が別に存在している。筆者は 2 点、それを確認した。その内の 1 つは、前田氏も挙げている『駿藩名譜』であるが、これについては後の No.126 の所で紹介する。

(3) いま 1 つは、渡辺一郎編『徳川幕府大名旗本役職武鑑 四』（「大名旗本」の部分は分かち書き。柏書房、1967 年 6 月 30 日）に収録されている「駿藩各所士族姓名録」である。これは前田氏が触れていない資料なので詳しく記しておきたい。

『駿藩各所分配姓名録』と同じ横長の小冊子で、収録書では、1 丁ごとの見開きの形で、1 頁に 3 段または 4 段の形で影印が収められている。冒頭は冊子の表紙にあったと思われる文字で「駿藩各所士族姓名録」（「駿藩各所」は分かち書き）と記されているので、編者が勝手につけた題名ではなく、この名前が実在した文書であることが分かる。しかし、中身を見ると、人名録の冒頭は「府中奉行」から始まり、末尾には「学問所製本所／駿府江川町／本屋市蔵」（「／」は改行を示し、小栗が付したもの）と書かれていて、『駿藩各所分配姓名録』と共通している上に、彫られた字体まで同一に見える。しかし、前田氏が『駿藩名譜』について記しているように、一見同じようでも収録人数に微妙な差異があるケースもある（第 3 編の 62～63 頁）ようなので、ここでも本当に同一であるかを判定するには別に正確な検討が必要となる。

しかし、筆者には時間的余裕がなかったので、その検討は省き、岡田錠次郎が記載されている箇所があるか否かのみを丁寧に確認するに留めた。すると、この「駿藩各所士族姓名録」でも「ハ 四」の中に彼の名があった。しかも『駿藩各所分配姓名録』の「ハ 四」にある人名と、文字も並び順も一字一句同じであり、しかも字体も同じに見える。従って、両者は同じ版木を用いて印刷されたものと思

われる。それ以外の部分は丁寧に見ていないので、『駿藩名譜』に見られるように、『駿藩各所分配姓名録』と異なる部分が存在する可能性はある。現在の所、資料として2つが同一であるかどうかは正確には分からない。しかしながら、少なくとも「ハ 四」の部分は全く同じであった。そこには岡田錠次郎の名があるので、この別名資料からも、『駿藩各所分配姓名録』と同じ岡田の情報が得られることを記しておきたい。

**No.2の『駿府へ移住相願候家族人数書』**は、静岡県立中央図書館の蔵書を確認した。但し、同館所蔵の資料は、池沢政太郎氏が罫紙に手書きでまとめたものをA4大でコピーし、それを袋綴じにして冊子化したA5版の大きさのものである。中に記されている情報は個人名と同行人数のみで、肩書きや経歴等の情報は一切ない。1枚目の扉部分に縦書きで「駿府<sup>え</sup>移住相願候家族人数書」「国立公文書館保存内閣文庫より」と書かれているので、内閣文庫の実物から池沢氏が個人的に書き写した私文書であると分かる。この資料の66頁には「執筆者 池沢政太郎」、68頁には「池沢政太郎様寄贈」の文字もある。

なお、前田氏の本では「駿府」の次の文字は「へ」と書かれているが、現物の資料では明確に「え」と記されており、やや右肩に小さな文字で置かれていた。前田氏は断ることなく、現代仮名の「へ」に変更していることになる。意味としては「へ」でも間違いないのだが、資料に記された文字を敢えて書き換えるのであるから、それなりの注記が必要であろう。

この資料では、岡田姓の者として「岡田力次郎／同七人」（「／」は小栗が付したもので改行を示す。以下同）、「岡田啓阿彌／同六人」（以上10頁）、「岡田重造／同八人」（15頁）、「岡田助次郎／同三人」（41頁）、「岡田源三郎／同七人」（43頁）、「岡田源蔵／同参人<sup>さん</sup>」（46頁）、「岡田鈴之丞／同三人」（54頁）の7人が記されているが、岡田清直・錠次郎はなかった。

なお、同図書館には『駿府え移住相願候家族人数書 五十音別分類』の名で、本編と同様の手書き・冊子化スタイルの別資料もある。これにも「執筆者池沢政太郎」「池沢政太郎様寄贈」と書かれている（52頁）。こちらには12～13頁に岡田姓の索引があるが、上記の7人と全く同じ人名が本編記載頁と共に記されているのみであった。

- (1)のちに筆者は静岡県立中央図書館において、池沢氏の名が検索結果に含まれる『駿藩各所分配姓名録』7件全部を見た。このうち『駿藩各所分配姓名録〔1－2〕』、『駿藩各所分配姓名録〔3－5〕』の2つは、他の5件の資料をコピーして、2分冊にまとめ直したものである。この2つだけを見れば、残りの5件も見ただけと同じになる。実物を見て、それが分かった。しかも、この2つは普通に書棚に配架されているので誰でも簡単に利用できる。なお、『駿藩各所分配姓名録〔3－5〕』にも岡田清直・錠次郎の情報がないことを確認済みである。

（本稿は2020年2月26日に提出。読者の指摘を受け微修正した原稿を5月7日に再提出。次稿（その2）に続く）